

---

# 夢の続きに

藤枝 なお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢の続きに

### 【Nコード】

N6967Y

### 【作者名】

藤枝 なお

### 【あらすじ】

生まれつき体が弱く、母親を亡くしてからはさらにその症状は悪化していく。ベッドから起きられない日々の中で何度も同じ夢を見た。それは、一度も会ったことのない父親の姿。夢の中では辛い現実から逃げられる。そう思ったのに、あれ？これは夢？現実？目が覚めたら見たことのない部屋だった…。

## 第1話

お母さんが死んだ。

だけど、予想はしていた。年々弱っていくお母さんは、見ていて痛々しかった。だけど、お母さんは死ぬ間際まで笑っていた。そして、私にこう言った。

『辛いことがあっても、信じていれば…きつと叶う。あなたも、お父様にきつと会えるわ』

そして、笑って死んでいった。どうしてそこまで笑っていたれるのだろう。最後はベッドから起きられなくなっていたのに…。

お父さんは、その場に崩れ落ちて泣いていた。本当にお父さんはお母さんのことを愛していたんだ。

お母さんがベッドから起きられなくなつてからは、お父さんも一緒に暮らしていたのだが、それまではお父さんは少し離れた家に一人で住んでいた。

お母さんは、身重の体でこの近くに倒れていたらしい。それをお父さんが見つけて、世話をした。そうして2人は次第に近い関係になつていったのだという。

お父さんは何度かお母さんに結婚を申し込んだのだけど、何故か結婚ということにはならなかったようだ。詳しくは教えてくれなかったのでわからない。

私がお父さんと呼んでいるのは、ただ自然とそう呼ぶようになってきたからなのだという。私のお父さん。でも、血は繋がっていないお父さん。私ができることを知ったのは、物心がついてすぐの事だった。

お父さんは大好きだった。だけど、私の中の何かがこの人は本当のお父さんではないと言っていた。それをお母さんに聞いたら、お母さんは「あら、わかるのね」なんて笑っていた。そして、先程の事実を知ったのだ。

だけど、それでも私はお父さんとお母さんが大好きだったし、毎日楽しく過ごしていた。

ただ、お母さんが病気がちだったのに似たのだろう、私も小さい頃からよく体調を崩していた。それは成長するにつれて悪化していった。きつといつか私もお母さんのように衰弱して死んでいくのだろう。そう思うと怖くないわけではないが、お母さんのように笑顔で死ねればいいと思っている。

「そんなところにいると風邪を引く」

「お父さん…大丈夫よ」

お父さんは窓辺に座っていた私にひざ掛けをかけると、困ったような笑顔を浮かべて、仕事に行ってしまった。

お父さんは、お母さんが亡くなってからは仕事前と仕事の後に顔を見せる程度で、寝泊まりはしなくなった。

理由はなんとなくわかる。私がお母さんに似ているから。きつとお父さんは私を見ながらお母さんを見ているのだろう。だからあんなに辛そうに私を見るんだ。お父さんの、お母さんに対する愛情が

感じられる。ただその一方で私の存在がなくなっていくようだった。

「つつ…！」

突如、激しい耳鳴りと頭痛に襲われる。最近よくあるのがこの耳鳴りと頭痛なのだ。その度に、微かに話し声と、耳障りなノイズのような音が聞こえてくる。いよいよ幻聴が聞こえるようになったのかもしれない。

「アリア！」

「ア、ラン…！」

駆けつけてくれたのは、向かいのお店で薬局をやっている2歳年上の幼馴染だ。彼は小さい頃から私の面倒をよく見てくれた。優しく、時に厳しく見守ってくれた人だ。

「大丈夫か、とにかくベッドに行こう」

うまく歩けない私を軽々と抱き上げて、アランは私をベッドまで運んでくれた。そして、痛みが治まって眠りにつくまで手を握ってくれていた。

今は、お父さんよりもアランと一緒にいる時の方が安心する。腫れ物に触るようなお父さん。このまま一緒にいてもお父さんがおかしくなってしまう。だから、本当は私が離れた方がいいのだ。だけど、この調子ではそうもいかない。

アランにも、いつも迷惑をかけてしまっている。これではいけないと思っではいる。だけど、どこかでアランに頼っている私もいる。このままではいけないのに。

夕方、目が覚めるとアランの姿はなく、代わりに手紙が置いてあった。『夕方また来る』と一言だけの手紙でも、私の心を温かくしてくれた。

そして、その言葉通りいくらしもないうちにアランが来てくれた。手にはたくさん薬草や薬。相変わらずだ。

「体はどうだ？」

「まだ頭は痛いかも……」

「そうか、何か食えるか？」

「欲しくない」

ここ数日、私は食べ物を受け付けない。食べても吐いてしまうのだ。そのためここ数日でかなり痩せた。いや、やつれたという方が正しい。

と、またあの頭痛だ。今度は今までにないくらいの痛みが私を襲う。

「おい、アリア！しっかりしろ！」

痙攣を起こしている私を、アランが呼び戻そうと必死に呼びかける。それでも、この激しい痛みには私は意識を失いかけた。その時、

アランが私をきつく抱きしめた。

「ダメだ！戻って来い！」

その言葉に、意識を失いかけた私だったが、どうにか遅い来る痛み  
みの波に耐えることができた。

「よかった……」

「アラン……ありがとう……」

私の言葉も聞かず、アランは再び私の体を抱き寄せる。そして震えながら耳元で言った。

「アリア、よかった……」

「アラン……」

アランはしばらく抱きしめた後、私の目を真っ直ぐに見つめる。  
いつものアランではない様子に、私も緊張しながら見つめた。

「アリア。俺と結婚しよう」

「……アラン……？」

告白を通り越したプロポーズに、私は文字通り目を丸くしてしま  
った。

「いや、ごめん。気が早いよな。でも、俺はアリアが好きだ。守り  
たいんだ……！」

返す言葉がなかった。私の心の奥に秘めた想い。アランが好きだ  
という気持ち。まさかアランも同じ気持ちを持っているとは思わな

かった。

「だけど、アランにこんな重荷を背負わせてはいけない。もう永くないのは分かっているのだから、悲しむ人を増やしてはいけない。」

「ダメ……」

「アリアが断る理由は、俺が嫌いだからじゃないよね」

「え……」

「アリアの事だ。どうせ心配かけたくないとか言う理由だろう。それは受け付けない。結婚はまだ早いと思うけど……でも、俺の気持ち、知っておいて」

そう言うのと、アランは照れ臭そうにして食事を作りにキッチンに行ってしまった。

その後ろ姿が、とても愛おしく思えた。アランのことを考えるとアランの気持ちを受け入れてはいけない。だけど私は気持ちを止められなかった。

歡喜と少しの罪悪感を抱えながら、その日は眠りについた。



## 第2話

翌日はよく晴れていて、久しぶりに温かな日差しが降り注いだ。こんな日は外に出たくなってしまうが、お父さんからアランからも大反対されてしまった。

昨日、仕事を終えたお父さんにアランが私とこのことを話した。意を決して打ち明けたんだけど、意外にもお父さんは驚かなかった。

お父さんは一言、『アリアをよろしく』とだけ言った。まるで自分の役目は終わったと言わんばかりに。

もしかして、翌日からは来てくれないのではないかと思って心配したのだけれど、ちゃんと来てくれた。やっぱり血は繋がっていないくても、お父さんはお父さんなんだと思った。

「ねえ、本当にダメ？」

「外？」

「うん」

「どうしても出たい？」

「うん！」

もしかして！と思って期待していたら、アランは私の額に手を当てて、そして一言。

「ダメ」

今日は熱の方が…。私でさえ気が付かなかったのに、どうしてアランには分かってしまうんだろう。

消化に良い食事と、アランの家からもらった薬を飲み、ソファに腰かける。調子のいい時は窓の外を眺めながら、ソファに座って編み物をするのだ。

小さい頃から外に出られなかった私は、編み物ばかりしていた。お母さんに教えてもらった編み物は、今ではかなりの腕前になっている。

お母さんも外に出られない分、編み物や縫い物をして、生計を立てていた。私もそれに倣って、編み物をして、それを売っていた。もちろん売りに行くのはお父さんだったんだけど。でも自分の作ったものが売れるというのはすごく嬉しくて、なんだか少し大人になった気がした。

そういえば、今日はあのノイズみたいな音や変な声は聞こえない。私の体調と何か関係があるのだろうか。

「やっぱり耳鳴りと幻聴かな…」

そう考えると全てが解決するのだから。でも、単なる耳鳴りと幻聴では納得がいかない。何が納得いかないのか自分でもよくわからないのだけど、何かが違うのだ。どこか胸騒ぎがするというか、何かを待っているような…。

待っている…そう、私は何かを待っている。何を待っているの？自分の事なのに分からない。そんな感覚がここ数日は強くなっている。いつからかと問われれば、間違いなく、お母さんが亡くなっただけからだろう。

もしかして、お母さんが呼んでいるの？とも思ったが、なんとなく違う気がする。お母さんは私を向こうに呼んだりしない。

「怖い顔して何考えてるの？」

「アラン…。なんでもないの、ただちょっと疲れちゃったかな」

「朝からずっと編んでるもんね。そのマフラーどこまで伸ばすんだ？」

「え、きゃっ！」

言われて手に持っているマフラーを見ると、3m近くの長さになっていた。ああ、もったいないけど、適当な長さにまでほどく。

次は何を作ろうか。お母さんが好きだった、ポンチヨでも作ろうか。よく自分の作ったポンチヨを着て、編み物をしていたお母さん。前のは古くなったから、最後に着ていたのは私が作ったものだった。

タンスの奥からそれを取り出して着てみた。お母さんの香りがある。少しだけ体が楽になった気がした。アランがお店に戻ると、私はまた編み物に没頭した。

かなりの時間集中していたようで、ふと気が付くと辺りは暗くなり、ポンチヨを含めて帽子や靴下など大量にできていた。少しやりすぎたかもしれない。だが、体の調子が良い時に作っておかないと、間に合わないのが実態だ。

「ジゼル…？」

「あ、お父さん。お帰りなさい」

「あ…ただいま。アリア、その上着は…」

お父さんは私の着ていたポンチョを指差して言った。

「お母さんのよ。これを着たらなんだか体が楽になった気がする」

「そうか…。今日は調子が良さそうでよかった。私はもう帰るよ」

「え、もう?」

「ああ。おやすみ」

「おやすみなさい…」

それから、お父さんはあまり家に足を運ばなくなった。それでも一日1回は顔を出してくれるが、それも短時間になってしまった。

アランに相談して、お父さんに聞いてもらっても、ただ「忙しい」や「風邪をうつしてはいけないから」というばかり。

「私、何か嫌われるようなことをしちゃったのかな?」

「そんなことないだろ。心配されたくなくて来れないんだよ」

アランはそう言って励ましてくれるが、私はどうも嫌な予感がしていた。そして、それは当たってしまったのだった。

あの日から1か月。もう外は真っ白な雪景色だ。最近ではお父さんは顔も出してくれなくなった。

心を痛めていると、アランがバタバタと走って私の部屋に入って

来た。

「どうしたの？そんなに急いで」

「どうもこうも！これ！」

アランが差し出したのは一通の手紙だった。差出人はお父さん、そして宛名は私だった。

「今玄関でこれを見つけたんだ」

恐る恐る封を開けると、そこには見慣れた文字でびっしりと文字が書かれていた。お母さんと出会った時の事、私が生まれた時の事、私の成長していく過程など、事細かに書かれていた。お父さんが自分の子どもではない私を愛情もって育ててくれたことがよくわかる文面だった。

手紙の最後には、こう書かれていた。

『私はジゼルを心から愛していた。それ故に、ジゼルが死んでからは、日に日にジゼルに似ていくお前を見ていられなくなってしまった。本当にすまない。アラン君と幸せに……』

それを読んで、私はショックよりも、「ああ、やっぱりな」という思いの方が強かった。あのお父さんの表情は、私に対する愛情よりも、戸惑いの方が強かったのだから。

手紙を読んだアランは酷く憤慨したが、私はこれでよかったと思っただ。お父さんのためにも、私のためにも。

ただ、一つ残念なのは、お父さんも私の本当の父親について何も

知らなかったということだ。お母さんが私に教えてくれなくても、もしかしてお父さんは知っているかもしれないと思っていたから。

だけど、お母さんはお父さんに何も話さなかったという。ただ、一度だけ口を開いたのは、お母さんがお父さんと出会ったその日に発した言葉だけだった。

『愛した人の子どもと一緒になら、大丈夫』

私はお父さんの手紙で、このことを初めて知った。そして、お父さんの手紙の中の言葉を思い出した。

『私はジゼルを愛していたが、ジゼルが私に対して抱いていた感情は、家族に対する愛情と一緒にだった。ジゼルが心の底から愛したのは、アリアの父親だけだったのだろう』

だからお母さんは自分の体調が悪化するまで、お父さんと一緒に暮らすことを拒んだのだ。だから結婚を申し込まれても頑なに断ったのだ。

疑問が一つずつ解消されていく中で、私の中のある想いが強くなっていた。

『本当のお父さんに会いたい』

お母さんが最後まで愛し続けた人。どうしても会いたい。

### 第3話

お父さんが姿を消してから、私の体調はどんどん悪化した。アラシが言うには精神的な要因もあるとのことなだけけれど、それにしても酷かった。

しばらくはベッドから起き上がれない日々が続いたし、そんな私を献身的に看病してくれるアラシにも疲労の色が見て取れた。

こんな時、お父さんがいてくれたら…。目を閉じると浮かんでくるのは姿を消したお父さんの姿と、まだ見ぬ本当のお父さん。

どんな人なのだろうか。私と似ているのだろうか。何をしているのだろうか。どこに住んでいるのだろうか。そして、私のことを知っているのだろうか。

この頃から熱でうなされていると、知らないはずの本当のお父さんの声が聞こえてくることが多々あった。それも以前よりも鮮明だ。単なる夢だと分かっているのだけれども、夢の中で私は『お父様』と嬉しそうに笑っていた。

そうか、本当のお父さんは『お父様』って呼ばれているのね。大きな背中に私と同じ金色の髪の毛、顎の髭がダンディだわ…。

16歳にもなって、お父様の膝の上に座って楽しく話をしている夢を見るなんて…。目が覚めてからいつも恥ずかしくなってしまう。だけど、どこか嬉しい。本当に金髪で、髭があるなんてわからないのに。

『アリア』

そう呼ぶ声が懐かしいと思うのは、きっと私の願望だからなのだろう。

ベッドから動けない私の楽しみは、編み物からこの夢の中でのお父様との触れ合いに代わった。

『アリアは何が好きなんだ？』

『私は編み物が好きなの。この前はポンチョを編んだのよ』

『ジゼルに似たのだな。ジゼルもよく編んでいた』

夢の中で、お父様は優しく頭を撫でながら言った。相変わらず顔は何故か見えないが、それでも私に流れる血が、この人が父親だと言っていた。

『お父様、どうして私はお父様のお顔を見れないの？』

『…すまない。もう少し待ってくれ。そうしたらきっと迎えに行くから』

『絶対？』

『もちろんだ』

『わかったわ。約束ね』

小さい子みたいに指切りげんまんをして、お父様に抱きついた。



「ただ、その体はどんどん薄くなっていく。今日はここまでのおまじだ。」

「アリア…！」

目を開けると、アランが心配そうに私を覗き込んでいた。

「どうしたの？そんな顔をして」

「いや…寝言を言っていたから…」

「寝言…きゃっ！」

アランは私が起き上がるなり私をきつく抱きしめた。

「どうしたの、苦しっ…」

「行くな」

アランは顔を上げることなく言った。

「どこにも行くな！行っちゃダメなんだ…！」

「アラン…」

私は、彼のその言葉に何も返すことができなかった。

「お前が、本当の父親に会いたがっていることは分かっている。だ

けど、俺は…」

そこまで言って、アランは言葉を詰まらせた。きつと心優しいアランのことだ。これ以上は言うてはいけないと思ったのかもしいない。でも、その気持ちは痛いほど伝わった。

「アラン…」

私はアランを束縛してはいけない。まして、もう永くはないのだから。

「私、アランの事が好きよ」

だからこそ、アランには幸せになってもらいたいのだ。

「だから、もうここへ来てはダメ」

それが1番なのだ。誰にでも優しくて、気が利いて、頼れるアラン。町の人からの人望も厚い。そんな彼を私が独り占めしてはいけない。

「嫌だ。それだけはアリアの願いでも聞けない」

「でも、このままじゃアランのためにならない…」

「俺のためになるかならないかは俺が決める。今日は帰るよ。明日…また来る」

私の反論を受け付けることなく、アランは帰って行った。

最近、私は思うのだ。アランは私を好きだと言ってくれているけれど、それは責任感から来るものではないのかと。また、お母さん

がお父さんに対する情が家族への愛情だったように、私に対する愛情は、家族に対するそれなのではないかと。

それが私の不安や罪悪感からそう思うのかもしれないが、本当に彼が私のことを好いてくれていたのであれどうであれ、私と一緒にいてもこの先の未来はないのだ。だったら、早く心の優しい彼を解放してあげたいのに。

「どうしたらいいんだろうね…」

『どうした？元気がないな』

『うん…実はね…』

また同じ夢の中で、私はお父様にアランのことを相談していた。これまで、私の体調がずっとすぐれないことは言っていなかったのですが、お父様はとても心配してくれた。

『いつから体調が悪いんだ？』

『昔から…。それでも小さい頃は外で遊べたのよ。だけど、最近はベッドから出られないの』

『そうか。その青年…アラン君と言ったか。彼もアリアのことを好いてくれているんだな…時間がないか…』

『えっ…』

『いや、何でもない』

お父様の最後の言葉は聞き取れなかったが、アランのことを話したら、どちらの気持ちも分かると言って、一緒に悩んでくれた。それだけで、私の気持ちは少し軽くなった。

『お父様…私、早く死んでしまいたい…』

『何を言い出すんだ』

『だって、もう歩くことすらままならないし、このままだとアランまで倒れちゃうし…お母様のところに行きたい…』

『そんなことを言っではいけない。…お前の体はやはりそちらの水に合わないのだな』

今度はお父様の呟きも聞き取れた。

『やはりって…』

『お前の体はそちらの水によって徐々に蝕まれていつている。ジゼルがそうであったように…。今日話を聞いていたがもう限界だな。ようやく見つけたんだ。手遅れになる前にお前をこちらに連れ戻す』  
『え、ちよつと待って！言っている意味が分からないわ！』

いきなり水が合わないだとか、蝕まれているだとか、果ては連れ戻すだとか…！そもそもお父様はどこにいるの？第一これって夢じゃないの？

「意味わかんない！」

飛び起きた私の体は、既に黄金の光に包まれていた。そして、光の中心から出てきた腕に、体ごと引きずり込まれた。

## 第4話（ルイ）

俺はこの16年間、一つの事しかやっていない。仮にも王の側近中の側近、シルヴァン様に仕える身でありながら、主を放っておいてこんなにも長い間研究に没頭することになるうとは。

その研究というのも我が主の最愛の人を探すための研究だ。シルヴァン様の奥方様はジゼル様と言って、それはお美しい方だった。けどどこか抜けていて、目が離せなくて手がかかる…いやいや、楽しませてくれる方だった。

シルヴァン様の溺愛ぶりも王宮内では名物だった。王をも一目置いている国内No.2の実力者、鬼のシルヴァン・ベクラールが、ジゼル様の前では人が変わったように優しい眼差しになるのだから。

それもジゼル様が身籠ってからは一段と溺愛ぶりが増した。他の男は目を合わせただけで氷のような視線を浴び、話ただけで射殺すような視線を浴び、下心など少しでも出そうものなら鬼の制裁が待っているのだ。

ジゼル様はそんな様子をただ笑って、毎日楽しそうにして見えておられた。お腹が大きくなればなるほど、シルヴァン様の過保護っぷりは加速したが、ジゼル様はそんなことお構いなしに、街や森に遊びに出かけられた。当時14歳の俺は、23歳のジゼル様に振り回されっぱなし。そんな時に、事故が起こったのだ。

『捕まえる！』

ジゼル様のお供で街に出た時だった。丁度王宮に仕える魔術師た

ちが誰かを追っている様だった。

『ジゼル様、私の傍から離れないで…っ…っ…っ！いない！』

ジゼル様は王宮で魔術師をしておられた。だから、魔力はかなり高く、無茶もかなりするお方だった。それをわかっていたはずだったのに。

『見てー！ルイ！捕まえたわよ！』

『おやめください！もしものことがあつたらどうするんですか！』

もうすぐ臨月だというのに、ジゼル様は全く分かっておられない。それに、俺には分かる。ジゼル様の魔力はこのところ安定していない。おそらく、お腹の中のお子様の影響もあるのだろう。だからこそ、俺がジゼル様についているのだ。

『ルイ、ごめんなさ…』

『ジゼル様っ！』

逃走者を捕まえて意気揚々と俺の元に戻ってくるジゼル様。その途中、突如として異界渡りの術が発動してしまった。

『きゃああああっ！』

『ジゼル様　っ！』

ジゼル様はワープホールに飲みこまれてしまったのだ。異界渡りの術はとても高度な術で、かなり高位の魔術師にしかできない。それに、発動した者でもどこに飛ぶかはわからないという何ともいい加減な術なのだ。

ふと見ると、ジゼル様が捕まえたという逃走者が、取り押さえられながらにやりと笑った。その時俺は全てを悟った。この男が…！

いつものジゼル様なら跳ね返せた程度であっただろう。しかし、身重の体には無理だった。俺は頂垂れた。どう報告すればよいのか…。

最愛のお方を失ったシルヴァン様など、想像しただけで恐ろしい。しかし、この重大事件を報告しないわけにもいかず、俺は王宮へと急いだ。

しかし、シルヴァン様はもうすべてを知っておられた。聞けばジゼル様がいつもつけておられたペンダントはシルヴァン様のプレゼントで、それには遠視の魔術がかけられていたのだそうだ。

ジゼル様が異界渡りに飲みこまれた直後、シルヴァン様は会議中にもかかわらず遠視の魔法を使い、ジゼル様の状況を確認した。その瞬間に同席した者たちは、みな一様にシルヴァン様の怒りと悲しみに充てられて気を失ったという。

『ルイ』

『はい…』

『お前の魔力を見込んで頼みがある』

命令ではない、シルヴァン様の『頼み』。逆に恐ろしい。

『本日よりジゼルと娘、アリアを連れ戻すための研究をしてほしい』

『は、はい…』

『何年かかってもよい。今からだ』

『わかりましたっ！』

もう生まれてくる子どもの名前まで決まっていたのか…。俺の魔術師人生をかけて、必ずこの研究は成功させる。いや、させなければならぬ。

そう思って16年間やってきた。

研究を初めてみて、初めて分かったこと。それは異界渡りの術がいかにもいい加減かということだ。特に術を使った男が既に処刑されているために、どの辺りかも想像がつかない。

そもそも異界など数えきれないくらい存在しているのだから、そこから手がかりを探すのだって手間がかかる。

俺は微かなジゼル様の力を追って、いろいろな場所を探した。ある世界はまだ石器を使っていたり、ある世界は高い建物や動く金属に人が乗っていたりと、これまで1000以上の異界を見てきた。見るだけならそう難しくはない。

そして、探し始めてから16年目、ようやくお2人がいる世界を見つけたのだ。私たちの世界と似てはいるが、魔術が存在しない世界のようなのだ。

ジゼル様が日に日に弱っているのは、私たちにもわかった。それもそのはず。私たちは命の源である魔力を持続させるために神霊山から湧き出る魔水を食事に利用している。それを飲まないと、体の魔力が上手く浄化されず、自分の体を侵食してしまうのだ。

1日2日飲まなくても支障はない。飲まずに生命を維持できるのは、魔力の強さにもよるが、10年前後だ。ジゼル様は16年経っ



ている。もう歩くことすらままならない。

『今すぐ連れ戻せないのか!』

『正確な場所が分からないことには…あと3カ月は…』

『くそっ…』

そうこうしている間に、ジゼル様は息を引き取ってしまった。あの時のシルヴァン様のお姿は見ていられなかった。そして、俺も自分の無力さを感じた。

だけど、こうしてシルヴァン様が自分を保っていられたのも、アリア様がいらっしやっただからだと思う。

あれから、俺はどうにかアリア様の夢に繋げることができないかと模索した。夢渡りなら異界であってもできるのではないだろうか。

それを提案したらさすがシルヴァン様だ。数日のうちにやったのけた。そして、アリア様との初めての会話を成し遂げたのだった。

実は初めのうちは俺も同席して2人で夢渡りをしていたのだが、どうやら2人だとノイズが入ってしまう上、アリア様の体にも負担になるようなので、改良を加えて1人でやることになったのだ。

もう何回目かになる夢渡りを終えたシルヴァン様は、目を覚ますなりこう言った。

『もう用意はできているな。これから、アリアをこちらに連れ戻す』

『これからですか!?!』

『もう1秒たりとも待っておれん!アリアも限界だ。すぐに準備をしる』

『はい！』

アリア様も16歳。いくらシルヴァン様とジゼル様のお子様で魔力は強いといえど、16年も、しかも生まれてから一度も魔水を口にしていないとなると限界が来てもおかしくはない。

今度こそ。今度こそ俺はシルヴァン様とアリア様、そしてジゼル様のために…！

## 第5話

目を覚ますと、そこは見慣れない部屋だった。私、どうしてこんなところにいるのだろう。考えながら体を起こすと、いつもの明るさがなく、暗いことに気付く。不思議に思いつつ辺りを見回す。

白を基調としたシンプルだけどセンスのいい部屋に、アロマだるうか、微かに何かの香りがする。とても落ち着く香りだ。

ベッドを降りて部屋の中を歩いてみるが、やはり足取りが軽い。多少のふらつきは残るものの、家にいた時よりも確実に体が楽になっている。

「もしかして、死後の世界…」

などと考えて、バカらしいと思い直す。死後の世界だったらもつと楽にしてほしい。窓の外を見るが、やはり見慣れない景色が広がっている。

どうしてこんなところにいるのか、思い出せるのはお父様の夢を見て、目を覚ましたら光に包まれていて、さらに目を覚ますとここにいた…わけがわからない。

どれが夢でどれが現実なのか分からなくなってきた。もしかして、これも夢なのかもしれない。ほっぺをつねってみると痛かった。夢じゃない…。

「アリア、入るよ」

聞き覚えのある声にドアの方を振り返ると、そこには見慣れた、でも初めて見る男性が立っていた。この人は…

「お父様…?」

「ああ…分かるのか?」

夢の中で見たお父様は背が高く、体格もよくて、金髪で、顎に髭があつて…。だけど肝心の顔は見えなかった。今初めて顔を見る。切れ長の目と通った鼻筋。他者を委縮させるような威圧感があるのに、どこか優しい。私の中に流れる血が言っている。

『本当の父親』

「分かるの…。お父様でしょうか?本当の…」

「ああ、アリア。間に合つてよかった。おかえり」

お父様は私をきつく抱きしめる。その腕が微かに震えているのがわかつて、どうしようもなく泣きたい気持ちになった。お父様はずっと私を待っていてくれたんだ。

「お父様、会いたかった!」

「アリア…!」

感動の再会をしていると、ドアをノックする音が聞こえてきた。慌てて離れようとする私をお父様は離してくれず、そのまま抱き上げて返事をした。

「失礼します」

入って来たのは若い男性。お父様と同じくらいの身長だけど、体

つきはもう少しほっそりしている。だけど、家にいた時に見てきた周囲の男性と比べると、やはり体格が良かった。

「シルヴァン様、姫様の湯浴みの用意ができました。湯浴みの後、お食事にいたしましたよ」

「そうだな。アリア、詳しい話は食事の後にしよう。まずは風呂に入ってさっぱりしてくるといい。2日間眠りっぱなしだったんだ」「2日!?!」

驚いたことに、あの光に包まれてから2日間も目を覚まさなかったのだという。その間水しか飲んでいないらしいというのに、やはりこの体調の良さは何かある。聞きたい事が山ほどで、何から聞きたいのかも自分の中で整理できていないので、とりあえず言われるがまま湯浴みをすることにした。

「アリア様付きの侍女をいずれ探さねばなりませんね」

「いえっ！そんな、大丈夫です！むしろお風呂は自分で入りたいです！」

男性に言われて慌てて断る。侍女って何？そんな身分じゃないし！仮にそんな身分だったとしてもお風呂にまでついてこられても困るし！

お風呂にまでついてきそうだった女官長さんを丁重にお断りしてゆっくりとお風呂に浸かる。このお風呂もとても気持ちがいい。疲れが取れる。この分だと食事も入りそうだ。

ぐくぐく、とお腹が盛大に鳴った。食事のことを考えたからだろう。食事のことを考えてお腹が鳴るなんて、初めてのこともかもしれない。今まで食事は義務でしかなかったのだから。

湯浴みを終えると、今度は断りきれず女官長さんが髪を乾かして整えてくれた。あれ、なんだか一瞬にして乾いてないですか？

与えられた服も、今まで着たこともないくらいの豪華なドレスで、着るのを躊躇うくらいだった。

「おお、アリア。綺麗だよ」

「ありがとう」

お父様も…素敵…！先程とは服と着替えていて、何かの正装かと思われる服でばっちり決めていた。青を基調としており、お父様にピッタリだ。

「さあ、まずは食べなさい。口に合うかな？」

見たことのない食事だったけれど、どれも美味しくてついつい食べ過ぎてしまう。いけないと思って少し加減しようとするのだけど、食べるとお父様が嬉しそうに見るものだから、お腹いっぱいになるまで食べてしまった。

そして食事がすむと、いよいよ私が聞きたかったことが聞ける。

場所をダイニングからリビングらしき場所に移して、さっきの女官長さんに紅茶を入れてもらったら準備は万端だ。

あまり人に聞かれたくないのか、この場にいるのはお父様と私と、さっきの男性だけだった。

「さて、何かから話そうか…。まずは自己紹介といこうか」

お父様はさつき男性が呼んでいたように、シルヴァン＝ベクラールという名前のようだ。ベクラールという性をもつ男性に、私の心は弾んだ。本当にお父様なんだ、と実感した。

お父様は王宮に勤めていて、王様の右腕として働いているのだという。肩書は難しく覚えてられなかったのだけど、とりあえず王宮に勤める騎士さんたちのトップにいるらしい。実質この国のNo.2なんだって。お父様、すごい人だったのね…。

「私はシルヴァン様に…ベクラール家に仕える魔術師、ルイ＝グレンジエと申します。今後、アリア様の身の回りのお世話は私がさせていただきますので、何でもお申し付けください」  
「あ…はい」

ルイさんは黒髪の短髪で瞳の色も黒かった。吸い込まれそうなその瞳に見入っていたら、困ったルイさんに逸らされてしまった。

「アリア、ルイは魔術の実力に関しては国内トップレベル…いや、トップと言っても過言ではない。困ったことがあれば何でも言いなさい」

「はい。あの…魔術って…」

「ああ、そうだったな。お前は魔術のない世界で育ったのだったな」  
そう呟くと、お父様はいよいよ私のいたところと、今いるところの関係について話してくれた。

異世界なんて俄かには信じられないことだらけだったけど、目の前でルイさんに魔術を見せてもらって、信じざるを得なかった。

だけど、どうして私が異界に行くことになったのか、すべての事

実を知って、私は安堵した。それは、お父様がお母さんをちゃんと愛していて、16年間ずっと私たちのことを気にかけてくれたからだ。

小さい頃は捨てられたんだと思ったこともあった。だけど、そう言うとお母さんは必ず強い口調で否定した。お母さんもお父様を信じていたんだ。いつか迎えに来てくれるって。

「ジゼルには申し訳なかったと思っている…」

「そんなことないよ。お母さんは、ずっとお父様のことを信じていたから。きつと天国で笑ってる。亡くなる時だって、笑っていたんだから…」

「アリア…」

そう。笑って死んでいった。だから、お父様が気に病むことではない。お母さんは幸せだったんだから。

「そういえば、お母さんは『アリア』って名前は本当のお父さんがつけたのよ』って言ったの。本当？」

「ああ。お腹にいるのが女の子だと分かって、必死に考えたんだ。美しく、優しい娘になってほしいという願いを込めて。女神アリアからとったんだ」

こういう話を聞くのは照れ臭かったけど、初めて聞くお父様からの話は、とても嬉しかった。

それに加えて、私の体調のことと異界の水が原因だと分かって本当に良かった。この世界の水はすべて魔水だから、ここで生活していれば体も丈夫になっていくだろうって。でも生まれてから一度も魔水を飲んでいなかった私は、普通に生活できて、魔術が使えるく



らいになるまでどのくらいかかるかわからないんだって。

まだまだ知らないことがたくさんありそうだけど、やっぱりしばらくは外出禁止みたい。体調がよくなったら、ルイさんに連れて行ってもらうおつ。

## 第6話

一夜明けて、少し冷静になって考えた。昨日はお父様に会えたことが嬉しくて、じっくり考えていなかったけれど、こちらに帰って来たということは、もう向こうには戻れないということだ。

アランは…？

アランには何も言っていない。このまま会えなくなってしまったら、アランはどう思うだろう。きっと、私が急にいなくなって心配している。

私の傍にいてくれるって言うてくれたのに。でも、離れて正解だった？あのままだったら確実に私もアランもいい方向にはいかないかといってこのまま忘れていいの？

「はあ…」

大きな溜息をついたら、ルイさんがそれに目敏くも気付いて声をかけてきた。

「どうしましたか？」

「いえ…何でもないんです」

いくらお世話係だとはいえ、昨日出会ったばかりの人に話す内容ではない気がする。

「アラン様の事ですか？」

「何で知ってるんですかっ!？」

私は一度もそんなことを話していなかったし、そもそもアランのことを知っていたとしても今それを考えてたってなんで分かったの？

「アリア様は顔にすぐ出ますね」

くすくす笑いながら紅茶を入れるルイさん。そうか、顔に出てしまったのね。それにしても勘がいい気もする。だいたいアランの事なんで知ってるんだらう。

「魔術は使ってませんよ」

また読まれた。そんなに私ってわかりやすいのだろうか。考え込む私を見てまたくすくと笑うルイさん。さてはルイさん、あんまり性格よくないな…。

「すみません。あまりに可愛らしく、ジゼル様に似ていらしたもので」

「お母さんに？」

「はい。まだ子どもの私はよく振り回されたものでした」

このルイさんを振り回すとは、お母さん何者…？

「お母さんって、どんな人だったんですか？」

「そうですね…一言で言うと、天真爛漫、自由奔放、だけど人を惹きつける魅力を持った女性でした」

ルイさんは懐かしそうな表情で、お母さんとの思い出を語ってくれた。

お母さんはお父様が止めるのも聞かずに馬に乗って骨を何本も折ったとか、新しい魔術の研究をして家を半壊させたとか、男性に誘われても気付かずに危うくその人の家までついて行きそうになったとか。

お母さん、あなた本当に何者…？

お母さんを溺愛していたお父様はそれはそれは毎日ヒヤヒヤしていたんだって。そこで、若いけどしっかりしていて実力もあったルイさんをお母さんの護衛として起用していたんだそうだ。

「ルイさんって、おいくつなんですか？」

「私は今年30になります」

「えっ、見えない！若いですね」

どう見ても20代にしか見えない。ともすれば20代前半にも見える。童顔なわけじゃないんだけど、やっぱり若い。

「ありがとうございます。あとアリア様、私には敬語は使わないでください。私はジルベル家に仕える者ですので、アリア様に敬語を使われると困るのです」

「そうなんですね…。すみません、でも急に言われても…」

「いいですよ。実は昨日シルヴァン様にも相談したのですが、好きにさせるとの事でしたので。少しずつ慣れていってください」

私が困るって分かっていたのに言ったな。やっぱりこの人意地悪かも…。でも、楽しそうに意地悪してるって、子どもみたい。だから若く見えるんだらうな。

「それで、アラン様のお話ですが」

忘れていなかったのか。話を逸らしたから忘れてくれたかと思っただけ、そう簡単にも行かないのね。

「あなたはどうなさりたいのですか？」

私は…向こうの世界には未練はない。だって、お父さんもアランも、あの世界で弱っていく私がいたら彼らの人生の足枷になってしまっから。

だけど、突然いなくなつて罪悪感がないわけではない。行く当てもなく弱っていると思われている私が急に姿を消して、アランが心配しないはずがないのだ。

「私は無事だつて伝えたいです。それで、お別れを言いたい」「分かりました」

え、分かつちやつたの？もしかして、私の答えも予想していたのだろうか。なんて物分かりがいいのだろう。

「それでは夢渡りの術をアリア様にかけて差し上げましょう。そこで、アラン様の夢に入り、アリア様のお言葉をお伝えするのです」「夢渡りつて…もしかして！」「お気づきになられましたか？」

気付くもなにも、これを使ってお父様は私の夢に現れてきたんですよ。だから、やっぱりあれは夢だけど、夢じゃなかったんだ。

「シルヴァン様は每晚夢渡りにチャレンジされていましたよ。初めの頃は上手くいかずに雑音が入ったり、体に負担をかけてしまつて

申し訳ありません」

あの時の頭痛はそのせいだったのね。でも、あの夢がなかったら私はすんなりこちらの世界でなじむことは出来なかっただろう。お父様とも碎けて話す事は出来なかったはずだ。

「今晚早速なさいますか？」

「はい。お願いします」

「ではシルヴァン様にもそうお伝えしておきましょう」

それから夜の間まで、私はアランに伝えるべきことを延々考えた。アランはきつと正義感と責任感が強い人だから、心配している。まずはそれを取り除いてあげたかった。

その夜。私はベッドに入り、ルイさんに夢渡りの術をかけてもらう。はずなのだけれど……。

「寝てくれないとかけられません」

「横に立っていられたら眠れません……」

枕元に立ってじつと見ていられたら眠れるものも眠れないって。でも、ルイさんはなかなか出ていこうとしない。

何でかと聞いたら、夢渡りの術を人にかける時は寝てすぐにか

ないといけないんだって。そうしないと意識が深く沈んでしまつて術がかからないらしい。

「眠れないから、何かお話ししてください」

「そうですね…何を話しましょうか」

「ルイさんのことを教えてください」

ルイさんからはお父様やお母さんの事は聞いたけれど、自分自身の事は全然聞いていない。知っているのは名前と年くらいだ。

「私の話を聞いても面白くないですよ」

「いいんです。面白いかどうかは私が聞いて決めるんです」

「では、他愛もない話を」

ルイさんは小さい頃は体があまり強くなって、すぐに怪我をしたり風邪を引いたりしていたんだって。ルイさんのお父さんがお父様に仕えていた関係で、そのまま跡を継いでベクラール家に仕えているのだとか。

幼馴染が1人いて、その人とは常に競い合っていたみたい。でも今はあんまり会ってないんだって。どちらが強いのかと聞いたら、魔力は自分の方があるけど、剣術や体術など、総合的な実力は向こうの方が上だつて教えてくれた。ちよっぴり悔しそうなルイさんが可愛かった。

私が覚えているのはそこまで。それからもう夢の中に入ってしまっていた。

『姫様、私の声が聞こえますか』

「聞こえます」

『では今からアラン様の夢に入りますので、少し我慢してください』  
「我慢つて…うわあっ！」

私は突然襲ってきた浮遊感と圧力に少し気持ち悪くなりながら、流れに身を任せた。事前に『抵抗すると意識が戻って来れなくなる』と聞いていたので、一切抵抗せずにそのまま流された。

浮遊感と圧力がなくなり恐る恐る目を開けると、そこは見慣れたお店だった。アランって、夢の中でまで仕事をしているのか。

アランを探すと、店番をしながら何か考え事をしていた。私はアランに走って駆け寄った。すると向こうも驚いたようにこちらを見た。

『アリア！走って大丈夫なのか！？』

『うん。もうすっかり元気なの』

『急にいなくなったから、心配した』

やっぱり、アランは私を気遣ってくれていたんだ。ちょっと痩せちゃったかな。

『アラン、今日は私…アランに言いたいことがあってあなたの夢にお邪魔しているの』

『夢…？ああ、これは夢なのか』

『違う、夢だけど、夢じゃないの』

複雑な事情を掻い摘んで必死に説明する。アランは何とか飲みこんでくれたようだ。頭のいい人で良かった。

そして、私は自分が異世界の人間であったこと、体調が悪かった



のは水が合わなかったこと、そして今は本当の父親と一緒に暮らしていることを話した。

アランは話を聞きながらいろいろ考えていたようで、口を挟むことはしなかった。

『私はアランのことは忘れない。だから、アラン…幸せになって』

『アリア…それは、もう戻って来ないってことだよな』

『うん』

『そっか…そっだよな。こっちにいたら体がもたないんだもん』

アランは自分自身を納得させるように、何度も何度も同じ言葉を繰り返した。この姿を見て、私は初めてアランが私を家族愛でなく、本当に女の子として好きでいてくれていたんだと実感した。

『なんか、すぐには受け入れられないってのが正直な気持ちだけど』

…

『うん…』

そっだろう。いきなりいろんなことを言って、アランも戸惑っているはずだ。だけど、私のために理解しようとしてくれてるんだ。

『アリアが今元気で、幸せなら…俺はそれでいい』

『アラン…』

『泣くなよ。決心が鈍るだろ』

困ったような笑顔で笑うアラン。どうしようもなく愛おしい。これが最後だけど、本当にありがとう。

思わずアランに抱きつくと、アランもきつく抱き締めてくれた。

そして、触れるだけのキスを落とす。ファーストキス。だけど、お別れのキス。きっと私は一生忘れない。

## 第7話（ルイ）

アリア様に夢渡りの術を施すと、俺は椅子に腰かけてその様子を見守った。アリア様には言い忘れていたが、俺は術を管理するためにアリア様の入っている夢を覗くことになるのだ。

アランという人物の話のアリア様に聞いてから、どんな聖人君子だと思っていた。見返りを求めるわけでもなく、ただアリア様のこととを思っている。彼女のためなら何でもやる、そんな男、信じられなかった。

だがどうだろう。夢の中で見たアランという人物は、アリア様の言うことを全て信じ、そして受け入れたではないか。

いくら愛した女の言うことだとしても、些か素直すぎるのではないだろうか。そう思ってしまうのは俺が純粋な気持ち忘れてしまったからなのか。

アランは自分の世界にいたらアリア様の命が危ないと理解したらしく、泣く泣くアリア様との別れを受け入れ、最後には熱いキスシーンまで見せられてしまった。

何だかこれではただの覗き男のようだ。これは不可抗力だと言い聞かせて自分の役目をもう一度思い直す。

キスをしている時のアリア様の表情はどうも艶っぽくて、アラン同様俺までしばし見入ってしまった。不覚だ。

「どうだ？」

「シルヴァン様」

今はヤバい。今シルヴァン様に見られてしまったら逆鱗に触れること間違いなしだ。アリア様はジゼル様に容姿がそっくりで、ジゼル様亡き後のシルヴァン様にとってはこの世の全てのような方なのだから。

俺の心配をよそに、夢の中の2人は離れる気配がない。もういい加減にしてくれと思いつながら、どうにかしてシルヴァン様に映像が見えないよう、話を逸らす。

「えー…アラン様とお別れは無事…。それよりアリア様が外に出たいと…。私としてはあと数日もすれば出られるようになるかと」  
「そうだな…あまり無茶をしなければいいが…。もう少しこの世界のことを知ってからの方がいいだろう。その辺の教育もお前に任せろ」

「承知いたしました」

本音では屋敷から出たくないのだろう。思った通りシルヴァン様はアリア様が外出されることを拒んだ。ジゼル様の件もあるからなおさらだろう。もっとも、あの頃よりは治安もよくなっているの、以前のような心配はないと思うが。

そうこうしている間に、アリア様とアランも話を終えたようだ。そろそろ戻って来てもらうこととしよう。

「アリア様、聞こえますか」

『はい、聞こえます』

アランには俺の声は聞こえないので、彼は不思議そうに辺りをき

よろきよろしている。

「そろそろお戻りの時間です。よろしいですか」

『ええ。お願いします』

俺は先程のように神経を集中させてアリア様をご自分の夢の中に戻した。俺が夢の中を覗くのはここまでだ。これ以上すると本当に覗き魔になってしまう。

「アラン君とはうまく話ができたのか」

「はい。きちんとお別れをなさっていましたよ」

「そうか。アリアには辛いことだとは思うが…仕方あるまい」

「はい」

内心アリア様に近づく男がいなくなって喜んでいくせに。とは言わずに同意しておく。眠れる獅子をわざわざ起こすようなことはしたくない。

「それより…王にアリアを紹介しておかなくては思っているんだ。無事帰って来たことに王も喜んでおられたからな。時期はルイに相談して思っ、待ってもらっている」

「そうですね…」

とうとう来たか。そろそろだとは思っていたんだ。王の右腕であるシルヴァン様の愛娘がようやくこちらの世界に戻って来たのだ。王に紹介しないわけがない。本来であれば生まれてすぐにするものなのだが、アリア様の場合は特別だ。

「やはり外に出られるようになりませんと。王にはそのようにお伝え願いますか」

「わかった。相変わらずだな」

「いえ、私は何とも」

「そうか」

苦笑しながらも、シルヴァン様はそこで追求をやめてくださった。この方の素晴らしいところは言わずとも悟ってくれることだ。たまには言っただけのいいこともあるが…。

「ところで久しぶりにクレールが手合せをしたいと言っていたぞ」「考えておくとお伝えください」

クレールの奴も、ヒマなのか俺をからかいただけなのか…。どっちにしる真面目に相手をするだけ無駄なのだ。

「しばらくは忙しくなりそうなんだ。アリアの事はルイ任せになってしまいかもしれんが…」

「ご安心ください。この身に変えてもお守りいたします」

「頼んだ」

そう言つと、本当に忙しいのだろう。また王宮に戻ってしまった。おそらく北の国の情勢が読めないのが原因だと思うのだが、俺には関係ない。俺は国家規模の政治に関しては口は挟まない主義だ。めんどくさいから。俺はベクラール家に影響がなければそれでいいのだ。

「う、ん…」

不意に寝返りを打ったアリア様の声に、はっと我に返る。アリア様の寝室に長くいるのもよくないな。

夢渡りの術のために一時解いていた保護魔術を再びアリア様に施すと、音をたてないようにそっと部屋から出た。

そして、俺はアリア様が目を覚ました時のために果物を用意しておく。熱さましの効果のある果物だ。先ほど夢に入った時に感じたアリア様の体温が少し高かったので、おそらく目を覚ます頃には熱が上がっているだろう。夢渡りをしたのだから体力を消耗しているはずだし。

俺がこんなにアリア様に甲斐甲斐しくしてしまうのは、ジゼル様を目の前で失ったことに、自責の念を感じているからだろう。それが分かっていてるので、時折アリア様と接していると無性にやりきれない思いに襲われる。

あの日のことを、シルヴァン様は責めない。それどころか、今度は大事な姫様まで俺に預けてくださっている。

俺はその思いに応えなければならぬんだ。決して、アリア様に危険が及ばないように。そして、幸せになれるよう。

ジゼル様に似て天真爛漫なアリア様に振り回されるのも悪くない。これから楽しくなりそうだ。

## 第8話

アランときつちりお別れをしてからは、少しすっきりして毎日を過ごすことができた。体調は波があつて、たまに起きるのが辛いなと思う日もあるけど、概ね体調良く過ごしている。

「ルイさん、そろそろ外に出たいな、なんて」

「…どうしてもですか？」

「はいっ」

ここに来てから2週間。私は一度も外に出してもらえなかった。お父様に頼んでもダメ、ルイさんに頼んでもダメ。抜け出そうとしてみてもすぐにルイさんに見つかる。もう欲求不満だ。なまじ体調がいいものだから余計に。

「そうですね…ではこの問題ができたらしみましょうか」

「ええ〜！意地悪〜…」

「できればいいですよ」

意地悪そんな笑みを浮かべて、ルイさんは私に問題を差し出した。何の問題かというと、この国の歴史や地理だ。

まずこの国の名前から王の名前、そして周辺の国との関係や立国から今までの歴史などをここ最近は勉強しているのだ。やはりこの世界で生きていくということは、一般常識を弁えていなければならぬということになる。そのため、ルイさんに教わっていたのだ。

日常生活の事に関しては、今までいた世界とそれほど変わらなかつたのだが、国の歴史や地理がさっぱり覚えられない。そんなの知



らなくてもいいと思ったのだけど、この国は愛国心溢れる人たちがかりで、小さい頃から当たり前のように教えられるので、知らないと浮いてしまうらしい。

「国の名前は？」

「パ…」

「パ？」

「パストウル…？」

「はい、正解です」

ようやく覚えられた。この名前は何故か覚えにくくて、覚えるのに1週間近くかかってしまった。

「では王の名前は？」

「う…」

これまた王様の名前も長いんだ。どこかに国名のパストウルが入っているのだけれど…。

「忘れました」

「まあいいです。王の名前など覚えなくとも」

「はあ」

この勉強をされていて最近気付いたこと。それは愛国心たつぷりの人が多いと言っている割には、ルイさんの王に対する発言はどこか投げやりだ。もしかして、ルイさんって外国の人なのだろうか。

「ルイさん」

「はい」

「ルイさんって外国人？」

脈絡のない質問に一瞬ルイさんの表情が固まるが、すぐに怖いくらいの笑顔になって毒づいた。

「まだ他の事に集中する余裕があったんですね。問題を増やしまし  
よう」

「ふえ〜…すみません〜っ」

もう一つ気付いたこと。ルイさんはやっぱり意地悪で腹黒かった。笑顔の下で何を考えているんだか、考えただけでも恐ろしい。

「顔に出てますよ」

「すみません！」

「いいです。休憩にしましょう。根を詰めても仕方がないです」

だけど、やっぱりルイさんって優しい人なんだ。お父様があれだけ信頼する人なのだから、悪い人でないことは分かっていたけれど、それでも初めは実際苦手だった。

何を考えているか分からないし、いつも笑いながらキツイことを言ってくる。だけど、だんだん慣れてきたら分かって来たんだ。ルイさんが本当に怒ったりキツく言う時は私の危険に関係する時だった。

それに、言った後はどこかバツの悪そうな顔をする。それってきつと『言い過ぎたな』とか思っているんだと思うのだ。そう思い始めてから、急にルイさんが身近に感じ始めてきた。

「気持ちの悪い顔をしておられますよ」

「き、気持ち悪くなんてないです！」

分かってはいても、グサツとくるときもあるんだけど。

「先程シルヴァン様からご連絡がありました。本日は食事を一緒にしましょうとのことですよ」

「本当!？」

「はい」

お父様は最近王宮に泊まり込んでいることが多い。ルイさんに教えてもらったのだけど、どうも隣国と貿易に関して揉めているらしく、少し良くない方向にいつているのだという。

そのせいで、お父様は遠征に行ったり王宮で政務をしたりして忙しいのだ。でも、今日は久しぶりにお父様に会える。それだけでウキウキしてしまう。

そんな私とは対照的に、ルイさんは浮かない顔。いや、一見すると顔自体はいつもと変わらないのだけど、どこか違う。そんな変化もずつと一緒にいたらわかるようになってきた。

「どうしたんですか？」

「いえ、なんでもありません」

って言う時は絶対何かある時だ。ルイさんはきつと私には言ってくれないだろうけど、でも心配してるってことは伝わってほしいから。

夜。お父様が帰って来た。私は待ちきれずに玄関までお出迎え。

「おかえりなさい」

「ただいま、アリア」

お父様の首に腕を回して抱きつくと、お父様はそのまま私を抱き上げた。まるで小さい子のようにだけど、この瞬間がとても嬉しいのだ。

「おかえりなさいませ」

「ルイ、変わりはないか」

「はい。シルヴァン様…もしや？」

「ああ。3日後だ」

2人が何の会話をしているのかわからず、首を傾げる私にお父様は優しく言った。

「食事の時に話そう。ルイ、食事の支度を」

「はい」

ルイさんは移動魔術でこの場を離れる。私はというと、抱きかかえられたままダイニングへ向かった。

食事が始まると、ルイさんはいつも傍らに立って給仕をしてくれる。いつも思うけど、この家の事って女官長さんかルイさんしかしていない。それしか人はいないのだろうか。

「さて、さっきの話だが…」

「はい」

「お前を王様に紹介する日が決まった」

私を王様に紹介…？それってどういう意味だろうか。

「シルヴァン様、言葉が足りていません」

「ああ、すまん。私のような王に近い者は子どもが生まれると王にお目通りを願うのだ。アリアの場合は生まれてすぐにはできなかつただろう。王もアリアの事に関しては心配されていたんだ。それで、報告を兼ねて王にあいさつをと思つてな」

なるほど。ようやく話が理解できた。どうやらお父様も王様も、私の体調が安定するまで待つてくれていたみたいだ。

でも、王様に直接あいさつするなんて緊張する…。赤ちゃんのうちにおけばこんなことはなかったのにな。

「そんなに心配することはない。王といつてもまだ若い。それにルイの幼馴染だしな」

「えっ!?!」

「シルヴァン様…」

ルイさんは心底嫌そうにお父様を見た。お父様は「すまん」と言いながら頭を掻いていた。この様子から察するに、ルイさんは王様と幼馴染だつて知られなくなつたのでは？

「ルイさん、王様と仲悪いの？」

「はい」

はいつて…さらつと言っちゃった…。でも、以前に話していた幼馴染って王様の事だったんだ。

「アリア、気にするな。子どものケンカだ」  
「……………」

豪快に笑いながら言い放つお父様の言葉に、ルイさんは眉間に皺を寄せる。2人にいったい何があったのだろうか。

## 第9話

「今日は街をご案内します」

私は耳を疑った。あのルイさんが、私に聞かれる前に、街に連れて行ってくれるなんて…！何か裏があるんじゃないかと疑問に思ってしまう。

「アリア様、全部顔に出ていますよ」

「はっ、すみません」

またその黒い笑顔で私を見る。でも、どうしていきなり街に連れて行ってくれるのだろうか。

「もうすぐ王宮に行きますからね。その前に外に慣れてもらおうと思っただけです。シルヴァン様と相談していただきます」

「そうですね」

ありがとうございます、お父様！この世界の街の様子って全然わからないから、すごく楽しみです。でも、1人で行くのはかなり不安…。

「もちろん、私も行きます」

「よかった！」

ルイさんが一緒に行ってくれるのなら心強い。というか最強！

「ただし、無茶はしないでくださいね。まだ本調子ではないのですから」

「はい！」

急いで支度をして、ルイさんの待つリビングに向かう。支度を手伝ってくれた女官長はにこにこ笑いながら言った。

「ルイ様とデートなんて羨ましいですね」

「え、どういうことですか？」

「だって、お2人でお出かけということとは、デートということになるでしょう？それに、ルイ様は今でこそベクラー家から出ることはあまりありませんが、昔は外へ出ては女性が放っておかなかつたんですよ。きつと、今日も注目的ですね。こんなに可愛らしい姫様とご一緒なんですよ。余計です」

確かにルイさんは人目を引く容姿をしている。というか美形だ。整った顔立ちに鍛えられた体。口さえ開かなければモテモテだろうな。

そういえばルイさんは彼女とかいないのだろうか。もう大人だし、かっこいいし、口は悪いけど優しいし、女性は放っておかないっていいし。

ルイさんはうちに住み込んでいるけど、ほとんど外出しない。それは私とずっと一緒にいるからだ。もしかして私、すぐくお邪魔？ああ、そうだとしたら今まで気づかなくてルイさんに申し訳ないことをしてきた。なんだか楽しみだった外出も、気が重くなってきた。

リビングに行くと、もう支度を終えたルイさんがソファに座って待っていた。いつもよりも少しカジュアルな服装で、また新鮮だ。

「どうなさいましたか？」

「ううん、何でもありません」



私はルイさんに悟られないようにするのに必死だった。だけど、これくらいで食い下がるルイさんじゃない。

「正直に話さないと、心を読みますよ？」

「そんなことできるんですか!？」

「私を甘く見ないください」

鋭い視線に怯んだ私は、結局口を割ってしまった。

「ルイさん、私のお世話…大変じゃないですか？」

「……………はい？」

ルイさんにしては随分マヌケな返事だった。私、また何か変なことを言ったのだろうか。恐る恐るルイさんを見ると、続けて、という目で私を見ていたので、そのまま話を続ける。

「ずっと私のお世話をしていたら、自分の時間がないし、その…彼女さんと会う時間もないし…だから…私迷惑かなって…」

しどろもどろ言う私を、ルイさんは無表情で見つめていた。そして、私の話が途切れるとわざとらしく大きな溜息をついた。

「言いたいことは終わりましたか？」

「え…?」

「腹に溜めていたことは全部ですかと聞いているんです」

いつにないルイさんの雰囲気、思わず首が壊れるんじゃないかと思うくらい縦に振った。それを確認すると、ルイさんはゆっくりと口を開いた。

「誰に何を聞いたのか知れませんが、私は自分の意思でここにいます。私は我が儘なので気に入らない仕事はしません。その辺は今度お会いになる王がよく知っているでしょう。それに、私に特定の女性はいません。ですからアリア様がご心配なさるようなことはありません」

淡々と答えるルイさんに、私は「はい」というしかなかった。でも、とりあえず私は迷惑じゃないようなので、そこはほっと一安心だ。

「あのですね、言いたいことがあつたらすぐに言ってください。アリア様は隠し事ができないのですから。腹の中に溜めておくと、そこから病魔に蝕まれますよ」

「はい…」

結局最後は私の心配をしてしまう。ルイさんってやっぱり優しい。そう思っていたら、ルイさんも同じことを考えていた。

「まったく、あなた方は親子そろって人の心配ばかり。優しいのは結構ですが、優しすぎると付け入られますよ」

「親子って？」

「ジゼル様です」

お母さんも、同じだったの？そういえば、ルイさんはお母さんも知っているんだ。好奇心でいっぱい目をしていただろう。ルイさんはお母さんのエピソードを話してくれた。

「ジゼル様がご結婚なされてこの屋敷にいらっしやってから、私は今のアリア様のように身の回りのお世話をしていたわけではありま

せんでした。どちらかというと、護衛に近い関係だったのです」

お母さんは実家から侍女さんたちがついてきたから、身の回りのことはその人たちがしていたんだそうだ。しかもなんと、そのお母さんの侍女さんのうちの1人が、今の女官長さんらしい！

「ジゼル様はよく外出なさる方で、その度に私がお供していたのです。そんなことが何回か続いたある日、ジゼル様が私におっしゃいました」

『いつも私の我が儘に付き合わされて、迷惑よね……。今度からあまり外出をしないように心がけるわ』

「泣きそうな声でおっしゃいました。その時、私はまだ14歳でしたので、上手いことは言えませんでした。ジゼル様は私の気持ち最後はわかってくださいました。まあその結果振り回されることになったのですが」

懐かしそうに語るルイさん。ルイさんは、お母さんの事を大切に思っていたんだな。

「私にとっては姉のような存在でした」

私の心を読んだかのような発言にドキッとしたが、本心なのだろう。とても穏やかな表情をしていた。

「ですから、アリア様もご心配なさらぬよう」

「あ、はい……」

ルイさんはまた表情を戻して私に向き直った。そして、私の余所

行きの服を見て、一言。

「可愛いですよ」

「…！」

初めてルイさんから褒められたかもしれない。というか、不意打ちの笑顔でそんなことを言うなんて反則だ。きっと私の顔は今真っ赤だ。

「さ、行きましようか」

からかわれたのだと分かってても、まだ顔の赤みは収まらない。ルイさん、ついに私で遊び始めたみたい。いつかやり返してやるんだから…！

## 第10話（ルイ）

「ルイさん！これ、これなんて言うんですか！？」

「これはウルマです。女性が好むお菓子ですね。そのままでも美味しいですが、少し焼くと美味しいですよ」

アリア様ははしゃぐようにしてどんどん先に進む。もっとも、まだ16歳だ。大人しくなんてしてられない年頃だろう。

しかし、ジゼル様の時も思ったが、あの容姿はどうも男の視線を集める。小さくて華奢で、でも女性らしい丸みのある体つき。そしてくりっとした大きな瞳にふわふわの髪。先ほどすれ違った男が「天使」などと呟いていたが、全く同感だ。

男の庇護欲をくすぐる天性の魅力を持つ女性だ。親子そろってこんなことでは、シルヴァン様の心配も尽きないな。

「ルイさん、これも全部魔水なんですか？」

アリア様が噴水を指差して尋ねた。こちらでは子どもでも知っている常識も、先日この世界に来たばかりのアリア様にとっては常識ではないのだ。

「はい。この世界の99%が魔水です」

「あとの1%は？」

「儀式などに使うための神水ですね。教会にしかありません」

「そうなんですわ」

光の下で見るアリア様は、屋敷の中で見るよりも健康的で、美し

かった。こんなことを考えているとシルヴァン様に知られたら速攻世話係を下ろされるだろうが、たまに大人の色香を感じることもある。年甲斐もなく、ドキリとさせられてしまうのだから不甲斐ない。

「どうしたんですか？」

「いえ。教会に行ってみますか？」

「はい！」

行くところ、見るところ、アリア様にとっては初めてなのだ。いろいろな経験をさせてあげなくては。

「少し失礼します」

「え？」

体調には細心の注意を払い、俺はアリア様を抱いて移動魔術を唱えた。一瞬視界がぼやけ、その直後にはもう教会の入り口に立っていた。

初めて移動魔術を使ったが、アリア様はどうだっただろうか。そう思って抱いていたアリア様を離し顔を覗き込むと、彼女の顔は真っ赤だった。熱でも出たのかと思い、額に手をやると、慌ててアリア様が否定した。

「ちっ、違うんです！ただ、急に抱きしめられたのでびっくりしちゃって…」

俺は一瞬頭が真っ白になった。じゅ、純粹すぎる。俺に肩を抱かれただけで真っ赤にならねば、こちらも意識を失ってしまう。必死に顔に出さないようにして、冷静に言う。

「すみません。配慮が足りませんで…」

「ルイさんは悪くないんです！あんまり男の人に免疫がないから…その、ルイさんが嫌でなかったら…ルイさんで練習させてください、ね？」

「はあ…」

練習つて、何の練習だ。と突っ込みたかったのは言うまでもないが、アリア様に他意はない。しかしこの天然ぶりはジゼル様以上だ。俺が度肝を抜かれるなんてなかなかない。しかも14歳も下の少女に。

「さあ、教会に入りましょう」

「はい！」

完全にアリア様のペースだ。これは早々に自分のペースにもっていかなければ。教会の中は今日は誰もおらず、シンとしていた。

「神水というのはここにはないのですか？」

「儀式の時だけしか使わない貴重な水なのです。普段はありません」「そうなのですね」

一通り教会の中を見学し、満足したのか街に戻ると言い出した。確かに、今日は集会もやっていないし、あまり長居をしてもつまらないだろう。

ふと時計を見るともうお昼の時間を過ぎていた。街に戻ったら食事しようと思案したら思いの外喜ばれた。デザートにウルマの出てくるレストランにでも行こうか。

「ルイさんって、なんだかエスコートが上手ですね」

「そんなことありませんよ。女性と出かけるのなんて、久しぶりで  
す」

「そうなんですか？でも、今日はすごく楽しいです」

満面の笑みで言われ、思わず笑い返すとまた花のように笑う。こ  
れに反応しない男などいるだろうか。いや、いないだろう。

これが数日後には王宮である男に合うのかと思うと、気が重い。

「あの、そういえば王宮にはルイさんは一緒にいらっしやるので  
すか？」

「アリア様がお望みならば」

「…う…あの…」

言い出しにくそうにもじもじしているアリア様。だいたいそこま  
で言われたら予想はつくのだが、そこで素直に言ってあげるほど俺  
は優しくない。

「言うてくださらないと、わかりませんよ？」

「あの、王様と仲が悪いのは聞いたんですが、あの…」

「何でしょう？」

「一緒に来てくれませんか？」

ようやく俺は自分のペースにもっていけた気がした。それはいい  
が、俺と一緒に行きたいだなんて、随分気を許してくれているのだ  
と思っただろうか。

「承知いたしました」

「ありがとう！」



もつとも、俺は初めから一緒に行くつもりだった。シルヴァン様はずっとついているわけではないだろうし、あんなところに1人で置いておくわけにはいかない。それに、天敵は王だけではないのだから。

この王へのお目通りが、16歳というタイミングはまずかつたな。慣例通り生まれた直後であれば、俺もこんなに心配などしなかったのだ。

「アリア様、食事が終わりましたら買い物をして帰りましょう」

「え、もう帰っちゃうんですか？」

「あまり顔色がよくありません。疲れたのではないですか？」

「う……」

図星のようだった。どうしてすぐにバレる嘘をつくのだろう。自分ではバレていないと思っているようだが、生憎すべて顔に出ている。

「ひあっ！」

「少し冷えてきましたね」

頬に手をやると、冷えて冷たくなっていた。そこで、俺は自分の魔力を少しアリア様に分けてやった。

「温かい……」

「私の力を少しあげました。これで買い物くらいはもつでしょう」

「ありがとうございます」

俺が、自分の魔力を人にあげたいと思ったのは初めてだった。自分自身に1番驚く。いくら世話係とはいえ、これほどまで俺がアリ

ア様に対して情をもつなど、思ってもいかなかった。そんな事とはつゆ知らず、アリア様は「こんなこともできるのね」などと感心している。

実は、アリア様が生まれる前から俺はアリア様の養育係となることは決まっていた。これはジゼル様直々の願いだった。

子どもだった俺は、自分の妹が生まれて来るかのような気持ちで心待ちにしていた。しかし、待っていた現実は姉のような女性と、生まれてくる妹とを同時に失う悲しみ。

俺は自分を責めた。何年経っても自分を許せなかった。20代の頃は自暴自棄になっていろんな女性と一夜だけの関係を持った。つまり遊び放題だったんだ。

だがそんな自分も嫌になり、20代後半になってからはそれもやめた。そして、研究の没頭しシルヴァン様に心配されるほどやつれた時期もあったが、その結果ジゼル様とアリア様を見つけた。

ジゼル様が亡くなったことは悲しかったが、アリア様が帰って来てくれたことは俺にとって救いだった。

俺を俺でいさせてくれる存在。それが自分だなんて、アリア様は微塵も感じていないのだろう。彼女を守る。それだけで、俺の存在意義は保障されるんだ。

彼女がいずれ好きな男性の許に嫁ぐまで、俺はアリア様の笑顔を守るのだ。

## 第11話

いつもの120%おしゃれをした私は、ついに王宮までやってきた。ルイさんの腕をぎゅっと握って離さない。いや、離せない。ルイさんの腕はもはやわたしにとって命綱だ。

「アリア様、落ち着いてください」  
「だだだ…だつてっ、無理ですっ」

高い建物を見上げると、その威圧感に押し潰されてしまいそう。これから王様に会うのに、こんなんじゃ心臓がもたない。

しかも、お父様は仕事があるので後で合流することになっている。本当にルイさんについてきてもらってよかった。

この前ルイさんと街に出かけてから、何度か移動魔術を使って移動したから、ルイさんとくつつくのは割と慣れた。だけど、まだ不意打ちだとドキドキしてしまうのだけだ。

だから、今日はなるべくルイさんにくつついていようと思っている。ルイさんも呆れてはいるが止めないので、それをいいことにとつと腕を掴んでいるというわけだ。

「アリア様」

「はい？」

「言わなくてもいいとは思いますが、王宮の中では私から決して離れないでくださいね」

「もちろんですっ!」

ルイさんの言うとおり、言わなくても離れる気なんてない。でも、それをあえて言うなんて何が待ち受けているのだろうか……。

門をくぐると、見張りの騎士さんたちがルイさんを見て一斉に敬礼した。ルイさんはそれに気を留めるでもなく、そのままどんどん歩いて行く。ルイさん、何者？

それから王宮の中を歩いていると、「お疲れ様です！」「お久しぶりです！」など、ルイさんに向かってのあいさつが飛び交う。それに一切応えることなく、ルイさんは進む。

「ルイさん、顔が広いですね」

「昔ここにいた時期がありましたからね」

昔ここにいたって、勤めていたってこと？でも、ルイさんは14歳の時にはもうベクラー家には仕えていたって言うていたし、それよりも以前ということなのだろうか。

「知りたくてうずうずって顔してますね」

「う……」

どうもルイさんには隠し事ができない。素直にこくと頷くと、ルイさんは少しだけ笑って、話してくれた。

「10年くらい前、大きな戦争があったんです。この前勉強しましたよね？」

「はい」

10年前の戦争。それは今問題になっている北の隣国との間に起った。パストウルは勝利に終わったのだけど、それでも大きな被

害を受けたのだ。

「その時は私も参戦しました。全魔術師に招集がかかったので仕方なく」

「嫌だったんですか？」

「嫌ですよ。あの時は国のために渋々です」

ルイさんの過去に何があったのかわからないけど、本当に王宮とは距離を置きたいんだということがひしひしと伝わってくる。それなのに今回一緒に来てもらって、申し訳ない。

「今回は別に関係ありませんから、余計なことは考えないように」

またまた釘を刺されてしまった。ルイさんは勘がいい。

「それで、前魔術師団長の下…つまり副団長として戦って勝利をもぎ取って来たんです」

「そうそう、お前がいなかったらパストウルはきつと壊滅してただろうね」

突然後ろから聞こえてきた声に振り返ると、そこには分厚いローブに身を包んだ男性がこちらに近づいてきた。私はいきなりの知らない人の登場にルイさんの後ろに隠れてマントをぎゅっと握りしめる。

「おいおい、怯えてるよ…俺ショック…。怖くないよ、出ておいで」

まるで子犬を呼ぶように声をかけられ、どうしていいかわからずにルイさんを見上げると、さらに自分の後ろに隠された。それって見なくていいってこと？

「おい！独り占めすんなよ。俺にも紹介しろ」

「お前に紹介する必要はない」

「待て待て待て！10年前は一緒に戦った仲じゃないか」

「10年も前の話だ」

ルイさんは相手のことは一切相手にせず、歩くことをやめない。それにめげない男性は、ついに私たちの前に回り込んで道を塞いだ。

「待てつての！」

「何だよ」

「何だよじゃねーよ！ベクラールのお姫さんだろ？俺にも紹介してくれつて」

男性は私のことを知っているようだ。ルイさんが相手にしてくれないと悟ると、ターゲットを私に変えてきた。

視線を私の目の高さに合わせて、真っ直ぐに見つめるとにっこりと笑った。

「俺、現魔術師団長のクレール＝バルビエ。クレールって呼んでいいから」

現魔術師団長…10年前とは違う人物ということだろう。それにさっきルイさんは「前魔術師団長」と言っていた。

「俺はね、3年前に魔術師団長になったの。10年前の戦争の時はルイの下でヒーヒー言って働いてたね」

クレールさんは懐かしそうに笑って言った。ルイさんの方は全く

表情を変えていなかったけれど。

「本当は前団長も団員もルイに残ってほしかったんだけど、結局ルイはベクラール家に戻った。まあこんな可愛い姫を助けるためだったってなら納得だ」

「余計なこと言うな」

ルイさんは、私とお母さんを助けるために…？

「それもありますが、1番は王宮に来るのが嫌だったということですよ」

「そっちも大きいけどな」

照れ隠しなのだろう。いつもよりぶっきらぼうなルイさんが少し可愛く見えて、思わず笑ってしまった。そうしたら目敏くクレールさんに見つかった。

「あ、笑った！可愛いねえ。いくつ？俺はこいつと同じ年。でも全く30に見えないって言われるんだ」

次から次へと繰り出される言葉に呆気にとられてしまう。だけど、確かにクレールさんも30歳には見えない。クレールさんは紛れもない童顔で、可愛らしい顔立ちをしている。だけど、どこか大人な部分も見え隠れして神秘的だ。真っ赤な髪も印象的。

「あ、見惚れてる？嬉しいね。とりあえず名前を知りたいんだけど？」

「すみません…私はアリア＝ベクラールといいます」

「声も可愛いね。アリアちゃんね。これからよろしくね」

手を差し出されて慌てて私も手を出そうとしたら、ルイさんに阻止された。それに驚いたのは私だけではなかった。

「お…おっとなげねー！心狭えよ！」  
「黙ってる」

ルイさんとクレールさんはよくわからない言い争いを始めてしまった。主語がないので何について話しているのかよくわからない。

「王に呼ばれているんだ。もう行く」

「王って…たまには名前で呼んであげれば？」

「断る」

「あーあ、2人とも頑固だからな。何十年もケンカしてさ」

「何十年もって…？」

前お父様も言っていた。『子どものケンカだ』って。なんでルイさんと王様がケンカをしたのか、私も知りたい。

「聞いてくれる？あのねー…」

「クレール！」

ルイさんが慌てて会話を遮る。クレールさんは不服そうにルイさんを見た。でも、ようやく優位に立ててちょっと嬉しそうだ。

「何？」

「…後で手合せしてやる」

「うっそ！マジで!？」

「ああ」

「よおし、久々に本気出せる！場所用意して待ってる！ごめんね、アリアちゃん。またね」



クレールさんは大興奮で走り去ってしまった。ルイさんと手合せするのがそんなに嬉しいのだろうか。ルイさんはクレールさんが完全に姿を消したことを確認すると、何事もなかったかのように再び歩き始めた。

## 第12話

玉座に座る王様は、思っていたよりも若かった。ルイさんの幼馴染なんだから当然かもしれないが、やはり私の中の王様は恰幅が良くて白い髭を蓄えているイメージだったのだ。

「お前がシルヴァンの娘か」

「はい…アリアと申します」

初めて対峙する王様はやっぱり威厳があつて、とてもじゃないけど正視していられなかった。だけど、王様は私をじっと見て目を逸らさない。気まずい…。

玉座の正面には私とお父様しかおらず、頼りのルイさんは脇に控えている。従者つてことだかららしい。私は困ってルイさんに目で助けを求めるけど、ルイさんもどうしようもなく困った笑顔で見返すだけだった。

「我がパストウルは魔術に長けた国として有名だ。姫は今まで魔術のない世界で育つたと聞く。これからは徐々に魔術の訓練もする」とよい

「はい」

「姫は自分の魔力を調べたか？」

「いえ、まだ…」

そういえばすっかり忘れていたけど、この世界の人間である私も魔力があるはずだ。今まではお父様やルイさんが使うのを当然のように見ていたけど、私も訓練すればできるようになるのかな。

「ルイ、どういうことだ」

いきなり王様の質問の矛先がルイさんに向いた。ルイさんはものすごく不機嫌そうな顔をして口を開いた。

「アリア様はまだ魔水を飲み始めてから日が浅く、もうしばらくしないと正確な魔力は分かりかねます」

これが…幼馴染の会話？好戦的な王様に、機械的なルイさん。2人の会話には妙な緊張感があって聞いている方としてはハラハラする。

「失礼ながら王様、娘はまだ本調子ではありません。無駄なケンカは余所でやっていただけですか」

お、お父様…王様に向かってなんてことを…。ただと言われた王様は気分を損ねるといふよりは、少し反省して「すまない」なんて謝っちゃった。意外と素直なのだ。

「この世界には慣れたか？」

「はい。ですがまだ戸惑うことも多くございます」

「そうか…提案なのだか…」

王様は少し考えて、ルイさんとお父様をちらっと見まわし、そして最後に私を見て言った。

「国の事は私が直に教えよう。こちらに来てもらうことになるが、私も異界のことを知りたい。その間、ルイには魔術師たちを鍛えていてもらえばいい。一石二鳥だ」

「え、あの…」

お父様を見るがまんざらでもないようで「なるほど」なんて頷いていた。そして名指しされたルイさんは、ものすごくどす黒いオーラを出していた。

「あの…」

「なんだ、姫？」

「王様から直々に国のことを教えていただけるのはありがたいのですが、無理やりルイさんを王宮まで付き合わせるのは…」  
「構いませんよ」

絶対に断ると思っていたのに、ルイさんは承諾した。王宮に来るのだからあんなに嫌そうにしていたのにいいのだろうか。

「まあ当然だろうな」

ニヤニヤと意味深な笑みを浮かべている王様はとても楽しそう。さっきの威厳はどこへやら、やっぱり2人は親しいのだと実感させられる。

「魔術師団が使い物にならなくなっても知りませんよ」

「構わん。最近大きな戦いがないからといってたるんでいるんだ。いい薬になるさ」

2人は仲が悪いと聞いていたのだけど、一見するとルイさんが一方的に嫌っているようにしか見えない。王様はどちらかというところルイさんと遊んでいるというか、ルイさんにじゃれているみたい。

「さて、堅苦しいあいさつはこれくらいにして…お茶にしよう」

「では私は仕事に戻りますので」

「ああ、シルヴァン。頼んだ」

今までの重い空気が一変。王様が玉座を降りて私たちを奥の部屋に案内してくれた。どうやらこの部屋はプライベートルームのようだ。

お父様は仕事に戻ってしまったのでいないが、私とルイさんはそのままその部屋のソファに腰かける。そしてなんと王様自らお茶を入れてくれた。私の分だけ。

「自分のは自分でやれ」

「別にいらん」

王様という仮面を取ったら、顔はいいけど口の悪い男性が出てきた。あれ、ルイさんみたい。だけどルイさんとはタイプが違う。

王様の威厳たっぷりで正視できなかった時は分からなかったけど、今になってじっくり観察してみる。王冠を取った金色の髪は思ったよりも柔らかそうだ。鍛えられた体は、ルイさんやクレールさんよりもがっしりしていた。きっと魔術よりも剣などで戦う人なのだろう。

「人前以外では俺の事は王様と呼ぶな」

「は…?」

「今日はシルヴァンも気を遣っていたみたいだが、俺は親しいやつには名前を呼ばせている。王と呼ばれるのは好きではない」

王様はそう言って、私に名前を教えてくれた。実はルイさんの授業で王様の名前も予習していたのに、綺麗さっぱし忘れ去られていた。

「フェリクス」メール「パストゥール…」

復唱してみるがやはり覚えにくい。だけど本人を目の前にしてそんなことを言えるはずもない。ましてや忘れるわけにもいかないの  
で、今回はしっかり覚えようと何度か心の中で復唱した。

「フェリクス様とお呼びして…？」

「ああ」

それが言いたかったからこの部屋に連れて来られたのだろうか。  
公式の場では言えないことだから？

「さつさと用事を済ませろ」

ルイさんは結局自分で入れた紅茶を飲みながらしらつと言った。  
ルイさんには私がここに連れて来られた理由がわかっているようだ。

フェリクス様はバツの悪そうな表情でルイさんを睨んだ。そんな  
に言い出しにくいことなんて、とても気になる。

「姫にこれを…」

「え…」

フェリクス様が差し出したのは、シンプルだけどセンスのいいピア  
スだった。とても綺麗だったのだが、いかんせん私の耳にはピア  
スホールは開いていない。

「これは、本来なら生まれてすぐに女児の耳に付けるものなのだ。  
私の魔術でも赤子であれば痛みを伴わずに耳に穴をあけられる。だ

が魔力が未知数で、16歳の姫となると万が一のことがあってはいけないからな。ルイに頼んだのだ」

「耳に穴…」

それを聞いて、一瞬目の前が真っ暗になった。ピアスはお母さんがしていても綺麗だなんて思っていた。だけど、耳に穴が開いていると知ってから綺麗だとは思ってもつけたいとは思わなくなつた。

だけど、この国では女の子は絶対につけないといけないのだそうだ。王様から、国の子どもたちへの贈り物なのだという。それをつけていないと外国人と思われるで生活する上で何かと不都合があるのだ。

「痛いですか…?」

「俺がやったら痛いかもしれない。俺はあまり魔術は得意ではないからな。不本意だが姫のことを考えてルイにやってもらうのが最善だと思つた」

聞けば、鎮痛や治癒魔術の効きは術者と対象者の信頼関係が大きく関係するらしい。だからクレールさんよりもルイさんを選んだそうだ。そう話した時のフェリクス様はとても嫌そうだった。

「とにかく受け取れ。アリア・ベクラールの人生に幸多からんことを…」

受け取つたピアスは、作られてから16年経つていとは思えないほど光り輝いていた。とても綺麗だが、つけるのにはまだ抵抗がある。

「ルイさん…」  
「こちらへ」

不安そうに見つめる私をルイさんは自分の方に引き寄せた。そして、私の耳に触れると小さく何かを呟き出した。ルイさんの触れている耳が温かい。

「目を閉じていてください」  
「はいっ…」

ぎゅっと目を瞑ってじっと耐えた。時間が過ぎるのがとても長く感じた。そしてしばらくして、ルイさんの「いいですよ」という言葉でゆっくりと目を開いた。

「鏡をどうぞ」  
「はい…うわぁ、綺麗。ありがとうございます」

鏡の中には青く光る石を耳に着けた私が映っていた。やっぱりピアスは持っているよりもつけた方が映える。

「よく似合っ」  
「ありがとうございます。フェリクス様」

まったく痛みも感じなかったので、私は上機嫌で王宮を後にしようとした。その時だった。フェリクス様が私、というよりもルイさんを引き止めた。

「クレールが稽古場で待っているそうだ」  
「チッ…」



しっ、舌打ちー！？さっきまで優しい笑顔だったルイさんが…。  
どうやらこれから例の「手合せ」が始まるようだ。渋々稽古場に向  
かうルイさんに私とフェリクス様もついて行くことにした。

## 第13話

じつと立ったまま動かないルイさん。そんなルイさんに猛攻撃を仕掛けているのもちろんクレールさん。

手合せだと言って始まった2人の対決はクレールさんの先制攻撃から始まった。そして、止むことのない攻撃がルイさんを襲う。ルイさんはその攻撃をただじつと受け続けている。

反撃はしないのだろうか。私の位置からはクレールさんの魔術でルイさんの姿はあまり見えないのだ。ルイさんがどんな表情をしているのかとか、呪文を唱えているのかとか、全くわからない。ただ対決が始まった時から全く動いていないことだけわかるのだ。

「ルイさん、どうしたんでしょうか…」

「どうしたもこうしたも、あいつにとってはそれだけってことだ。まったく嫌味な奴だ」

私が心配して呟いたら、フェリクス様はフンと鼻を鳴らして言った。それはどういう意味なのだろうか。首を傾げていたら、もくもくと立ち込めた煙の中からルイさんが飛び上がって一言呟いた。

「うわっ!」

その直後、クレールさんの声が聞こえたかと思うと、空に大きなドラゴンが現れた。一瞬本物のドラゴンかと思ったけれど、よく見たら…

「雷…?」

「あいつの十八番だな。あの雷はただの雷じゃないんだ」

ただの雷じゃないとはどういう意味だろうか。私が不思議に思っていたら、ドラゴンの形をした雷がクレールさんの繰り出す魔術をすべて消してしまった。

「あの雷は触れたものの魔力を吸い取るんだ。まったく厄介だ」

フェリクス様の解説を聞きながらも目は2人から離さない。とうか離せない。そのくらい2人は怒涛の攻撃を繰り出しているのだ。

先ほどよりも威力が増しているように感じるクレールさんの魔術。やはりさっきまでの攻撃はルイさんを挑発するだけのもので、全く本気を出していなかったのだ。

何がルイさんの気に障ったのかは知らないが、あの雷が出たあたりからルイさんも真剣に戦っている。煙の中でどんなやり取りがあったのだろうか。

「クレールも伊達に団長をやっているわけではないから、この戦いは長引くかもな。何か飲むか？」

「あ、ありがとうございます」

フェリクス様は呑気に魔術でテーブルと椅子を出して、ティーセットまで用意してくれた。本格的に寛ぐつもりだ。

今回の紅茶はなんだか甘い香りがする。何かのフルーツだろうか。鼻をクンクンやっていたらフェリクス様に笑われた。恥ずかしくて顔が赤くなるのがわかる。

「鼻がいいな。微量の果汁の香りが分かるか」

「果汁…ですか？」

フェリクス様は私の行動については触れずに、紅茶の中に入っている果実の説明をしてくれた。この国の代表的なフルーツのジンだそう。甘いお菓子のような香りがする。

「今度果実ごとシルヴァンに持たせよう。王宮にはたくさん生えているからな」

「ありがとうございます」

私たちが寛いでいる間も、2人の戦いはずっと続いている。相変わらず雷のドラゴンで魔術を無効化しつつ攻撃を繰り返しているルイさんと、それを上回るほどの速さのクレールさんの攻撃。本当に終わる気配がない。

「ルイさんって強いんですね」

今更ながら、つい口に出してしまった。クレールさんが強いのはわかる。だって団長さんなのだから。だけど、何でそのクレールさんと対等に渡り合えるルイさんが魔術師団に入っていないのだろうか。

「魔術において、今の国内にはあいつの右に出る奴はないだろうな」

「え、でもクレールさんは…」

「あいつも実力はある。だが、ルイはそれを上回るってことだ。時間が経てばわかるさ」

ちらりと2人を見ると、まだまだ白熱した戦いは続いている。私が見る限り互角のような気はするが、時間が経つと差が出て来るのだろうか。

「ところでアリア」

「はい？」

「お前は今まで異界にいたのだろうか？すんなりこちらに馴染んだと聞くが、向こうに未練はないのか？」

何気ないフェリクス様の一言に、私はふと改めて考えてみた。そういえば、アランと夢の中でさよならをしてからというもの、一度も向こうに戻りたいと思ったことはない。もちろん、アランの事は今でも大好きだ。だけど、未練はない。

「私の故郷はこちらだということですよ」

「そうか」

フェリクス様は満足そうに目を細めて笑った。不意に見たフェリクス様の笑顔にドキリとしてしまった。この人は王として接している時は威厳があつて怖い印象だったが、その仮面を取ってしまえば中身は案外可愛い人なのかもしれない。

「不便はないか？」

「はい。ですが、皆さんが魔術を使っていると私も使ってみたくありませんね」

「焦ることはない。子どもでもこちらの水を飲んで数か月しないと魔力が安定せずに魔術は使えない。アリアももう少しすれば普通に魔術を操れるようになるだろう」

ふわりと大きな手で頭を撫でられる。突然のことに驚きはしたが、嫌な感じはしなかった。むしろ温かくて心地よい。

「困ったことがあればいつでも言うといい」

心強い言葉に、私の頬も緩む。私の表情を見たフェリクス様もまた柔らかく微笑む。すぐ近くの壮絶な戦いの傍らで和やかな雰囲気醸し出す私たちに、戦っていたルイさんの視線が突き刺さった。

「う、ごめんなさい…」

咄嗟に謝ったがルイさんに聞こえたのか聞こえなかったのかはわからない。ルイさんと目が合ったのは一瞬で、次の瞬間にはまたクレールさんとの戦いに戻っていたのだ。

「気にするな」

フェリクス様は慣れたようにその視線を受け流した。

「あの…こんなことを聞くのは出過ぎたことかもしれませんが、お2人は幼馴染だとお伺いしました。仲はあまりよくないのですか？」  
「よくないな」

さらりと返されてしまった。どうして…と聞くのはあまりにも深入りしすぎだろう。だけど気になってしまう。いったいいつから、何があつて仲が悪くなったのだろうか。

「いろいろと聞いたそうな顔をしているな」

「えっ…」

「顔に出やすいと言われるだろう?」

やはり、私はすぐに顔に出てしまうらしい。隠し事が上手くないのは知っていたが、ここまで顔に出るタイプだったのかと思うとそれはそれで悲しい。

「あまり大きな声で言えた話ではないぞ」

「余計に知りたくなってしまうす」

フェリクス様はそれもそうだと肩を震わせて笑った。

「でも内緒だ。話したらアリアに呆れられてしまうからな」

「はあ…」

だったら思わせぶりな態度を取らないでほしいのに。そんな私の心を知ってか知らずか、この話はこれで終わってしまった。結局本人たちに聞いても教えてはくれなそうさ。

「お、見る。そろそろ差がついてきたぞ」

「え？」

言われて振り返ると、クレールさんが肩で息をしているのが目に入った。いったいどうしてこうなったのだろうか。よく見ていればよかった。

## 第14話（ルイ）

久しぶりに攻撃魔術を使ったせいか、少し動きが鈍っている。自分としては認めたくないが、少しずつ衰えてきているのかもしれない。もっと日々の鍛錬が必要だ。

一方で、毎日それなりに訓練をしているクレールは以前よりも速さや力が増している。魔力が増えたわけではないが、制御が上手くなっていることに内心焦った。

フェリクスは「たるんでいる」と言っていたが、やはり団に所属していて部下の稽古をつけていれば少しずつでも鍛えられていくと感じた。

これほど時間がかかるとは思っていなかったが、それでもまだ詰めは甘い。時間が経てば経つほど荒は見えてくる。

「くっそ、無尽蔵かよ」

「力をついたと認めてやってもいいがな」

「腹立つ…！さっき言ったこと、忘れんな！」

そう言つと、再びクレールは後ろに飛び退いて呪文を詠唱する。まったく、嫌な奴に目をつけられてしまった。俺はさっきのあいつの言葉を思い出しながら舌打ちをした。

『ベクラールの姫、可愛いじゃないか。随分懐いているんだな、お前に』

『近くにいるからだろう』

『ふうん。じゃあさ、俺狙うから』



『どつという意味だ？』

『シルヴァン様は姫を守るくらい力のある奴になら任せられるとおっしゃっていた。ならお前を負かせば、手っ取り早くシルヴァン様に認めてもらえるだろ。だから守るばかりでなくかかって来いよ！』

その言葉に俺の中の何かがぷつんと切れた。いろいろなところに引っ掛かりを感じたが、それがどこなのかということは最早どうでもよかった。この男の魔力が尽きるまで手を出さずにいてやろうと思っただが…。

その次の瞬間には久しぶりに大技を繰り出していった。俺は雷を操るのが得意だ。このドラゴンは試行錯誤してあの戦争の2年前に作り出した。俺自身が魔力を吸収するよりも効率よく他人の魔術分の魔力を吸い取ることができるのだ。

それと同時に自分からも攻撃を放つ。やはり昔よりも遅くなっている。だが力は衰えていないな。

そんなことを考えながらクレールの相手をしていると、傍らで楽しそうに談笑するアリア様とフェリクスが目に入った。

そして事もあろうにあの男はアリア様の頭を撫でだした。何をしているんだと憤慨したが、ここからではどうすることもできない。さっさと終わらせよう。

「ちっ…！何で急にっ」

疲れて攻撃の手が鈍っているクレールに、今まで以上の攻撃を仕掛けた。ドラゴンも魔力吸収ではなく攻撃に回す。すると、クレールはもう防戦一方だ。

一気に勝負を決めるためにドラゴンをもう一匹作ってみた。するとクレールの表情が変わる。

「何なんだよ！いつの間に2匹も操れるようになってんだよ！」

答える必要もない。俺だって少しは研究しているんだ。

そこからクレールが降参するまでさほど時間はかからなかった。目を回して気を失っているクレールを尻目に、俺はアリア様の許に歩いて行く。

「お待たせいたしました。さあ、屋敷へ戻りましょう」

「え、でも…クレールさんはいいのですか？」

「いいです」

あいつの心配などいらぬ。俺との手合せの時にはいつも最後はこうなっているのだ。あと1時間もすれば意識を取り戻すだろう。

「あいつのことは放っておいてくれて構わない。団の奴らにでも運ばせよう。奴らにもいい薬になっただろう」

フェリクスが笑って言った。その言葉を聞いて安心したようにアリア様も微笑んだ。どうしてこの短時間でこんなに打ち解けているんだ。睨むようにフェリクス見たが、あいつは俺の視線に気づかないふりをして何も語らない。

アリア様は何も気づかずに俺の傍に寄ってきて帰る支度をしている。俺は内心溜息をつきながらアリア様の肩を抱くと、屋敷へと移動した。

アリア様は屋敷に戻るとどさりとソファに体を投げ出した。顔を見ると少し赤らんでいるので熱があるのかもしれない。

「アリア様、少しお休みになられますか」

「はい…ちょっと気疲れしたみたいです」

その言葉通り、張りつめていた緊張が一瞬にして緩んだようになかなか立ち上がろうとしない。

「少々失礼します」

「はい？」

アリア様の前髪を片手で持ち上げると、彼女の額に自分の額を当てた。やはり少し熱い。

「少し熱があるようですね…アリア様？」

「い、ごめんなさい。びっくりして…」

アリア様は顔を真っ赤にして狼狽えた。それがおかしくて思わず笑ってしまったら、アリア様も同じように笑った。

「慣れないところに長いことお付き合いただき、すみませんでした。すぐにお部屋にお連れします」

俺はアリア様の返事も待たずに彼女の体を持ち上げると、そのまま寝室に連れて行った。アリア様は驚いた様子だったが、抵抗することなく私に体を預けた。それだけ疲れていたのだろう。

ベッドの前でアリア様がドレスのままだったことに気付き、慌てて魔術で着替えさせる。そしてベッドに降ろすと、アリア様は優しく微笑まれ、そしてすぐに眠ってしまった。早いな…。

しばらくそのままアリア様の寝顔を見ていると、入り口に人の気配を感じ、咄嗟に振り返った。

「夜這いですか？」

「バカなことを…。経った今王宮から戻って来たところで、熱があったから寝室までお連れしたまでです」

ニヤニヤする女官長。何を勘違いしているのだから。相手は俺より14歳も年下の少女だ。そんな感情をもつこと自体間違っている。呆れつつ、アリア様の寝室から出て自室に戻った。

自室のソファに座り、ふと「だが…」と頭を過った感情を意識の下に仕舞いこむ。俺がもつていい感情ではない。かといってクレールにくれてやるつもりもない。

これではまるで自分の娘のようではないかと自嘲する。実際娘がいてもおかしくない年齢になってしまったが、俺は結婚に興味はない。

結婚など興味はないのだが、子どもは欲しいと思う。それは、我がグランジェ家は代々ベクラール家に仕えてきたからだ。俺の代で

終わらせていいのだろうか、という不安はある。

そもそも、俺は昔はこんなにベクラール家に対して忠誠心はなかった。だが、成長するにつれてベクラール家というよりはシルヴァン様を慕うようになった。俺はシルヴァン様ほど外側も内側も強い方を見たことがなかった。この人について行きたい。そう思ったのだ。

そして、そのお子様のアリア様も知れば知るほど惹かれていく。純粹で素直、だけど芯は強く自由を好む。シルヴァン様とジゼル様の良いところを引き継がれたと思う。俺が惹かれないわけがないのだ。

惹かれるのは当然。だが、惚れてはいけない。彼女は主だ。俺が惚れていい人物ではない。間違いが起きぬよう気を引き締め直して、そろそろ目を覚ますであろう主の元へと戻った。

## 第15話（フェリクス）

ルイとアリアが去ってから、俺はクレールが目覚めるまでしばらくの間その場に立ち尽くした。

「まいったな……」

シルヴァンの娘…今年16歳になるというアリア姫は思いの外魅力的だった。というのも、俺は自慢じゃないがこれまで様々な女と接してきたのだ。だが、心から欲しいと思った女は今まで出会ったことがない。

女はまず俺の2つを見る。1つは容姿、そしてもう1つは「王」という肩書だ。特に即位してからは後者の方が多い。

宰相たちは早く結婚しろと煩いが、義務で結婚はしたくない。親父とお袋のように、ただ1人と添い遂げたいのだ。

幸い俺には弟が3人いる。妹も2人いるし、俺が結婚しなかったとしても世継ぎはどうにでもなるだろう。後継者争いなど俺の兄弟には無縁だ。何しろ全員同じ両親から生まれた兄弟たちだし、実際王位に興味はない。他国から見れば変な王家だろう。

すぐ下の弟は既に結婚しているし、その下の弟も婚約済みだ。そのため、両親も俺が義務感で結婚することを望んではない。本当に恵まれている。

そもそも、俺の理想の女なんて現れると思っていなかった。これまでいろいろいな女を見てきたが、いいと思った女でもどこか満足で

きないところを発見するとすぐに冷めてしまうのだ。

それがアリアはどうだろう。容姿は申し分ない。俺を見て怯えていたのは少しムツとしたが、もつと話してみたいと思った。そのため、無理にでも俺と会う口実が欲しくて、国のことを教えると約束してしまった。

その後、なぜそうなったのかは知らないがルイとクレールが手合せをしている間、2人の時間が持てた。話してみればなかなか面白い。純粹で、思っていることが手に取るようにわかる。それに、俺に媚びない。異界で育ったからか俺に対する偏見がない。

だがアリアは俺と話しながらもちろちらとルイとクレールを気にする。いや、正確にはルイを気にしていたのだろう。

この国に来てからまだ日が浅く、そのほとんどをルイと過ごしている。父親であるシルヴァンと過ごしているよりもルイという方が長いだろう。情が移ることもある。だが所詮それは家族愛。まだ恋愛感情ではない。俺の入る余地は十分だ。

「う…」

呻き声でハツと意識を現実に戻す。そういえばこいつ、まだのびていたんだった。

「いつて…あー、またかよ」

「いい加減一度でも勝てないのか」

「陛下は分かかってないですね。一度戦ってみてくださいよ」

「それにしても今日は派手にやられたじゃないか」

いつもならもう少し早く目を覚ましていてもおかしくはないのだがな。今日はなかなか時間がかかった。ルイの機嫌でも悪かったか。

「俺、ルイの逆鱗に触れたみたいなんすよね」

「逆鱗？」

「俺、アリアちゃんに惚れちゃったんすよね…で、シルヴァン様って『娘を任せられるのは自分より強い男じゃないと』って言ってたじゃないですか。だから、ルイを負かすのが手っ取り早いと思って…バカ正直に言ったらこの有様です」

「…バカか…」

自分の気持ちを簡単に他人に、しかもアリアと一番近いところにいる男に言っただけになるというのか。けん制するにもこちらの分が悪すぎる。やはり頭はよくないな。

「そうっすよね。やっぱりもったかつこいいところをアリアちゃんに見せないと。まずは強くならないと。そんで彼女に会う機会も増やさないと…」

考えていることはアホだが、こいつの行動力は侮れない。何しろ女受けする容姿と、巧みな話術は見習いたいほどなのだから。

「考えたんすけど、俺がアリアちゃんに魔術を教えるってどうですか？」

「…ルイがいたら必要ないだろう」

「そうっすよね…聞きましたけど、陛下はアリアちゃんに個人レッスンするんですよ？」

「まあな」

「ずるいなあ…俺にも何かないかな…」



そこで「何で陛下も？あれ、もしかして…」と考えがいかないところはこいつらしい。自分の事で頭がいつぱいなんだろうな。

「どうにか接点を作らないと…」

考えることは皆同じか。おそらくルイは俺の気持ちには気が付いただろう。だから毎回俺がアリアに教えている間、団の稽古を頼んだのだ。でもこれではクレールが乱入してきかねない。

「俺がアリアに勉強を教えている間、ルイには団の稽古を頼んだ。技術を盗むチャンスじゃないのか？」

「マジっすか？確かに。10年経つとやっぱり戦い方も変わってくるんですよ。いつの間にかドラゴンも2匹になってるし…」

やはり仮にも魔術師団長だ。魔術の話になると食いついてくる。俺の企み通り、クレールはルイの稽古を見学することにしたらしい。それで団も強くなってくれれば俺としては一石二鳥、いや三鳥だ。

「ってことはやっぱりアリアちゃんが王宮に来ている時は俺も会えないんすよね…」  
「そうだな」

おっと、珍しく魔術のことから離れるのが速かったな。クレールは惚れっぼいからどこまで本気かわからないが、これは思ったよりも真剣なのかもしれない。

「…なんで三十路の男がウジウジ悩まないといけないんすかね…」

それはもつともだ。いくら見た目は20代だとはいえ、大の男がこれではアリアでなくても引くだろう。

「だから俺は俺流で頑張りますよ。陛下も、俺やルイに先越されな  
いようにしてくださいね。では！」

「お、おい！」

こいつ…何もわかっていないフリをして全て分かってやがったな。  
まったく性質が悪い。しかしこいつは俺が思っていた以上に頭が切  
れるのか、それとも俺が分かりやすかったのか。俺が分かりやすか  
ったのだとしたら王として失格だな…。

それにしても、クレールまで本気とは…。これでルイも参戦など  
ということになったら面倒なことになる。

ルイが何を考えているのかなど知りたくもないが、アリアを大切  
に思っていることは確かだ。それが何なのかはまだ判断しかねるが、  
恋愛感情に変わらない保障はない。だから早く手を打たなければ。

30歳を手前にして、16歳の少女に一目惚れとは…運命とは分  
からないものだ。分からないから、わくわくする。これからが楽し  
みだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6967y/>

---

夢の続きに

2011年12月11日11時47分発行